

中等部・高等部

梨花祭

真野啓之 渡邊祐太

梨花祭は、近年の中等部・高等部において非常に大きな規模の学校行事であり、生徒が日々の学習成果を社会に発信し、学園の教育活動に対する理解と協力を得ることを目的として実施している。2024年度は学園創立100周年募金委員会主催の「JIYU1123」と同日開催とし、共学化後初めてということもあり、学園の歴史と未来を意識した行事として実施した。また、生徒主体による企画・運営を通して、責任による学び、協力・調整、課題の解決などの資質を養うことも大きな狙いとした。

1. 準備と運営体制

企画立案の中心は高等部2年生が担い、1学期より準備を開始した。夏休み前に「日々の学びを生かし、より良い未来を目指す」というテーマを全校に発表し、2学期には各クラスで具体的な企画を検討した。

生徒の運営組織は「運営」「会計」「食衛生」「会場」の4部門に大別され、必要に応じてさらに細分化した。高等部生と中等部生が混合で編成されたが、キャンパスが分かれているため意思疎通が難しく、中等部生が遠慮しがちな場面も見られた。ICTツールであるGoogleチャットを用いた情報共有は一定の効果を発揮したが、対面での打合せの重要性も改めて認識する機会となった。

準備が本格化したのは体操会終了後であり、短期間での作業が続いたが、高等部2年生と中等部3年生を中心とする運営体制により、困難を乗り越えて開催に至った。

2. 企画

2-1. 中等部の各クラスの企画

1年1組「謎解き迷路フォトスポット」(迷路とフォトスポットの製作)

1年2組「1-2 祭」(緑日)

1年3組「ウォーリーを探せ」(学園キャンパス全体を使ったスタンプラリー)

2年1組「わにわにパニック&フォトスポット」

2年2組「ビンGO」(ビンゴ大会)

3年1組「お祭りパンケーキ〜見た目より中身だと思います〜」(パンケーキ提供)

3年2組「3-2の焼きそばが喰えねえってのか?!」(焼きそば提供)

3年3組「ペニー's 研究所」(お化け屋敷)

2-2. 高等部の各クラスの企画

Aクラス「ええ昭和純喫茶」(喫茶店)

Bクラス「ふりふりポテト」(食事販売)

Cクラス「ダイオウ〇〇ゲーム」(体験型アトラクション)

Dクラス「緑日」(緑日)

Eクラス「E cafe」(喫茶店)

Fクラス「LUCKY AND LUCKY」(体験型アトラクション)

Gクラス「とんじーる」(食事販売)

Hクラス「パンケーキ」(喫茶店)

Iクラス「binary opposition」(お化け屋敷)

2-3. その他企画

写真部

ダンス部

演劇部

豚バラ串焼き

Rainbow Project

綿菓子

木工所

お汁粉

もち

手にも考えてもらおう数学

文藝同好会会誌販売

東天寮プレミアム食器販売

3. 当日の実施状況

当日は秋晴れに恵まれ、紅葉が始まったキャンパス全体

を会場として、中高全体で展示、舞台発表、模擬店、体験型イベントなど多彩なプログラムを展開し、訪れた来場者は 4,000 名を超えた。

「JIYU1123」との同時開催により、募金委員会や協力会の方々の活動や学園を支える思いを広く伝えることができた。また、生徒たちが主体的に企画した催しにより、学園の教育活動を地域や保護者などに具体的に示すことができた点も大きな成果であった。

4. 成果

第一に、例年以上に多くの来場者を迎え、学園の教育理念や学習成果を発信する機会となった。来場者からは「活気に満ちていた」「学園の一体感を感じられた」との感想が多く寄せられた。第二に、生徒の成長が顕著に見られた。特に運営に携わった高等部 2 年生からは、責任を持って行事を動かす経験を通じて、リーダーシップの重要性を学んだとの声があった。また、中等部生にとっても上級生との協働を経験する貴重な機会となった。第三に、協力会や募金委員会と連携して実施したことにより、学園を支えてくださる方々への理解と感謝の意識を生徒が深める機会となった。

5. 課題と改善点

・学年間の連携不足

高等部生が主体となった一方で、中等部生がどのように

関わるべきか判断に迷うことがあり、積極的に参画できない場面があった。役割分担の明確化と交流の場の設定が必要である。

・意思疎通の方法

ICT ツールによる情報共有は有効であったが、十分ではなかった。特に重要な事項は対面で協議する仕組みを定期的に設けることが望ましい。

・準備期間の不足

体操会終了後に本格的な準備を開始したため、短期間での準備作業に追われた。年間行事の計画段階から準備を前倒しし、余裕を持った運営体制を整える必要がある。

6. 所感

今年度の梨花祭は、4,000 名を超える来場者を迎え、生徒が主体的に取り組む行事として盛会のうちに終了した。同日開催の「JIYU1123」との連携により、学園の伝統と未来をつなぐ節目となった点も意義深い。

一方で、学年間の連携不足や準備期間の短さなどの課題も明らかとなった。これらを反省点として次年度以降の梨花祭に活かし、さらに円滑で充実した行事へと発展させていくことが求められる。

梨花祭を通じて、生徒たちは日々の学びを実社会に発信し、多くの来場者と共有する経験を積むことができた。生徒の成長と学園の教育を発信する有意義な機会であったと思う。